



Title	漢詩二首
Author(s)	佐野, 鈴子
Citation	懷徳. 1940, 18, p. 54-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89052
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

聞 梟

武 藤 甚

風沈月暈夜更移。陰溼深籠老樹枝。燈下偶繙賈生賦。幽窗蔽卷聽梟鳴。

白 雨 初 晴

迅雷霹靂震天根。驟雨沛然如覆盆。洗盡人間煩惱地。竹風斜日滿幽軒。

水 亭 看 月

蒼煙繚繞鎖汀洲。四望依微萬象幽。抵掌低吟堪發興。留朋情話亦消愁。嫦娥入坐扶清酌。歡伯聯牀伴唱酬。涼意滿身風色淨。嵐光一抹上江樓。

雁 度 寒 塘

春 原 暎 子

寂寂寒塘亂荻蘆。月漂波上伴輕鱸。雲邊鳴雁傳誰信。行客斷腸心念孤。

月 下 裁 衣 圖

動鉸軒前晚吹涼。剪裁無已母心忙。今宵對月兒何爲。豈不修牋懷故鄉。

秋 夜 寄 友

佐 野 鈴 子

訣別三年復值秋。小齋燈暗惹離愁。閒庭蟋蟀聲希處。再誦瑤音想舊遊。

種 竹

庭前種竹一句過。早已亭亭雅趣多。夏雨送涼風掃拂。紗窗招月影婆娑。

契沖が住みたりし和泉なる伏屋氏舊邸を訪ねて

音代節雄

水清く陽の暖き和泉なるこの里にして君は學びし

秋の日のしみらにぬくし柿の實のたわゝにみゆる伏屋の屋敷

庵のあと示すと主柿の實の下照る小徑藪かげに行く

池田川淙々として切崖の裾廻をめぐり秋の日ぬくし

切崖の藪下とよみ行く水を君聞きたりし庵の址かな

母

昭和十五年六月十八日發病

仲田應弘

食後の藥服まして横になる今の暑さは母にこたへむ

蒲團より伸して足よ冷たくてさすりくれよと云はぬ母かも

同じ月二十八日午後五時二十分逝く

リウマチの腫れも引きたる母の手を組まして従弟は有難がるも